

# 刈安賀殿と妙西尼

宮 下 良 明

(会員 佐伯市古江)

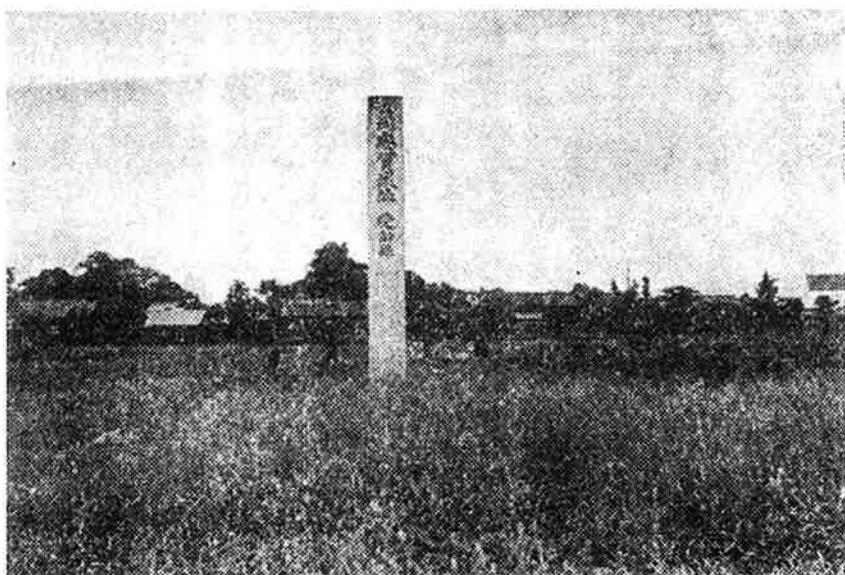
最初に刈安賀殿とは一体どの様な人物であろうか、あらましを説明しておきたい。「尾張国中島郡刈安賀村花井方」は現在の愛知県一宮市で、木曽川を挟み岐阜県との境に広がる地方が刈安賀殿の里に当り、佐伯藩祖毛利高政公は此の地の出身である。

中世の末期、織田・豊臣政権下に築かれた刈安賀城に本題の人刈安賀殿が居住、今日その城跡には記念碑が建ち昔が偲ばれている。

次に妙西尼とは藩祖毛利高政の御母堂として知られ余生を佐伯の地で過ごし没した方である。

## 一、高政の生誕地刈安賀

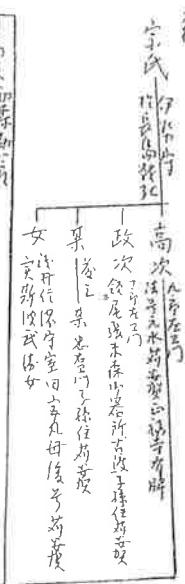
さて応仁の乱（一四六七）以後、戦国の争乱に明け暮れた尾張・美濃・三河・近江国の武将は、下剋上国取



刈安賀城址（昭和32年撮影）

りの政争を繰り返してきた。苅安賀は動乱の渦中にあり、歴史を物語る記録、伝承など多く残されているが、文政年間丹羽玄塘の書いた「尾張塘叢」には本題の苅安賀殿をはじめ森（毛利）一族の事蹟が掲載され、森氏が勢力を誇っていたことを物語っている。

### 【毛利氏略系】



- 新波武協毛利
- 尾張志

また「尾張志」には次のように記されている。

時に木曾川を挟む重要な砦である苅安賀城は家康方が守備、戦いの結果は徳川・織田軍が有利に展開したと伝えている。

これを境に家康は駿河・甲斐国領有を経て関東一四〇万石に伸し上がった。つまり信長が杵を持ち、秀吉が餅を捏ね、家康が餅を食うと言われる由縁である。家康の戦略上苅安賀城がいかに重要であったかが判る。

毛利伊勢守高政  
花井方村住居の人也村の成亥の方に上段といふ畠地あり森伊勢守居住の跡と里人いひ傳へたり落翁譜に伊勢守藤原高政を豊臣太閤の家人なりほんめ森勘八と申ける  
○ 中島

### 二、小牧長久手の戦い

日本歴史年表に記録されているこの戦いは織田信長なき後豊臣秀吉の天下となつた。しかし尾張ではなお織田一族の勢力が根強く秀吉は手を厄いていたと言われてゐる。天正十二（一五八四）年三月、豊臣軍対信長の第二子信雄・徳川家康合同軍との戦いが始まつた。

その発端は秀吉の策略に乗せられた清須城主織田信雄

は、苅安賀城主田丸、松島城主津川玄蕃・星崎城主岡

田長門守の三家老を呼び付けて殺害した。事件に驚いた家康の意見により、秀吉の策略と氣付いた信雄は激怒して秀吉討伐に立ち上がつた。この戦いを小牧長久手の戦

と云う。

### 三、徳川家康と刈安賀殿尾張志に載る毛利関係第二文

田安先の母は毛利伊勢守の娘なれば徳川神君誠にいはれ玉ひ國祖君<sup>公</sup>の御時此地を彼母に  
賜ひて居住せしめたが郷民尊敬して刈安賀殿と呼びなした。其室に居る謙非七左衛門と云ふもの  
前である。今も其子孫連続として此所に住んで居る。

内容を改めて想うと過去に於いて家康と森伊勢守との何らかの接点が既にあつたようである。

それは去る永禄三年（一五六〇）に起きた桶狭間の戦いが指摘される。織田信長は今川義元の大軍を奇襲し大勝した。当時家康は今川氏に人質の身であつたが、この戦いで解放され三河国領主に復帰し、後に信長と家康は盟約を結んだ。

戦勝の中心的役割を果たした毛利一族と家康の接点は、この時点から既にあつたと考えられる。

#### 四、受領名、「伊勢守」

「尾張叢」第五巻の記載

前記尾張守江内守秀政妹おとす室又曰毛利伊勢守武備ノ女也是以て江内守秀政混勤  
ハテニ政上宇摩野府右毛利伊勢守属城田信  
長子子治内守秀政仕太閤秀忠也云々是據難にて



小牧長久手合戦関係地図

右の内容は、河内守秀政の妹姫安賀殿は毛利伊勢守武衛の娘（武衛とは室町幕府三管領斯波氏の別名）で伊勢守二世高政はこの秀政と混同されたといふ意味。

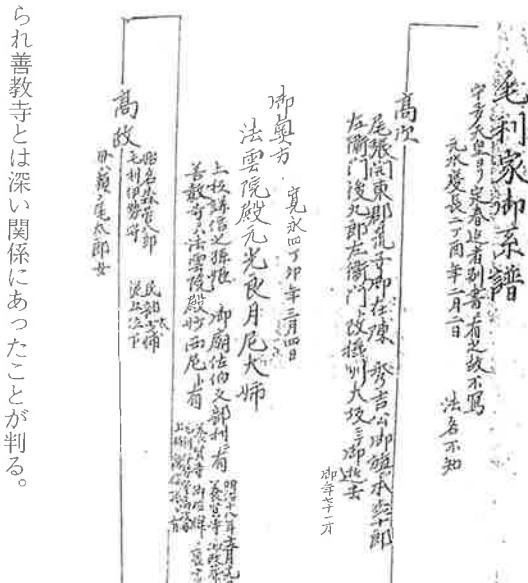
ちなみに秀政の出自は前に述べたが、桶狭間の合戦で今川義元を斬ったと伝えられ、この戦いを機に信長より飯田八万石を与えられた人物である。（『慶長三年大名帳』参考）全く荒唐無稽な話ではない。

さて毛利高政は慶長六年（一六〇一）初代佐伯藩主に赴任され翌七年伊勢守に叙任、官位は従五位下、三代高尚、八代高標、十一代高泰と伊勢守に任せられている。いずれにせよ伊勢守を高政に与えた家康と毛利氏との過去における関係を見逃すことはできない。

これまで佐伯で目にすることがなかつた毛利氏の事蹟は、尾張方面の諸資料に頼るほかなく、研究の対象として大筋は認めてよいと思う。

### 五、妙西尼と石川康長

下記の略系は養賢寺所蔵のもので、妙西尼とは系図上高政の母に当り、実年齢など以前の去就は判然としない。寛永四年（一六二七）三月四日没、御廟は久部東禪寺に葬られ、善教寺の位牌には法雲院殿妙西尼の諡で祭



られ善教寺とは深い関係にあつたことが判る。

時を同じくして慶長十八年（一六一三）佐渡金山不正に連座した罪により、毛利高政預かりの身となり約三十年間佐伯の地で過ごした信州松本の城主石川康長も妙西尼とともに熱心な一向宗徒、約三十年間佐伯で過ごしている。

康長は寛永一九年（一六四二）現在の善教寺の地で没した。このとき墓を設けず古市栗本にあつた善教寺を移

して康長の靈を慰めたと言われている。妙西尼とともに三河国（徳川領）上宮寺の門徒であった。高政に預けたその背景には、代々徳川家の老臣であったがゆえに家康の特別な計らいがあつたと言われている。

## 六、茹安賀殿と妙西尼

毛利伊勢守・毛利秀吉の母。斯く名づけられた。毛利伊勢守の娘で、いだへ信宗の孫女。元和元年（一六一五）久部村に五〇石の地を付され、寛永四年（一六二七）に亡くなり久部村に葬られた。戦国の世に生きた二人の女性が重なつて見えてくる。

右は「塘叢第五刊」に掲載の文章で、浅井家と毛利家の縁には浅井方の系図があり、田宮丸の母はお亀殿といい後の茹安賀殿と言つた。また次の文章には

一叶島郡石井村吉城  
尾張佐記云淺井新八戸居毛利伊勢守・毛利秀吉の母  
同長官田宮丸居城河内す秀政妹・新八戸居  
寛永ノ頃迄茹安賀殿在國す憐愍テ加ヘエラニラ  
カリヤスカ族ト申列毛利伊勢守・武揚・女也

とあり、寛永の頃まで茹安賀に居住しており、国主（家康の第九子）が憐れんだこの女性はカリヤスカ殿と呼ばれ毛利伊勢守武衛の女だった。冒頭に掲げた系図によれば高政の叔母に当たる。

一方高政の母はあざち様（法名妙西尼・法号法靈院）

と呼ばれ、元和元年（一六一五）久部村に五〇石の地を付され寛永四年（一六二七）に亡くなり久部村に葬られた。戦国の世に生きた二人の女性が重なつて見えてくる。

以上尾張諸方に伝承された史資料から毛利（森）氏に関する文言を抜粋してみたが、「一宮市史」が指摘するように諸系譜に多くの食い違いがみられ一概に信用することはできないだろう。

しかし茹安賀の毛利（森）一族が織田・豊臣・徳川と密接に関わってきた歴史的背景を知ることで、毛利高政の実像に近づくことができるのではあるまいか。

### 【参考資料】

尾張塘叢 尾張志 尾陽雜記 一宮市史 張州府志  
慶長三年大名帳外